



私たちの学校再建支援で完成したステージ。学校や村の行事に欠かせないものです。コロナ問題で学校は休みでしたが、近隣の子どもたちの踊りで竣工を祝いました（プロルサロ村）



2020年4月25日発行

NPO法人ビラールの医療と自立を支える会

(英文名略称・HANDS)

本部：〒227-0033 横浜市青葉区鴨志田町 516-11

TEL & FAX: 045-500-9151

E-mail: hands-mindanao@nifty.com

<http://hands-mindanao.a.la9.jp/>

郵便振替口座 00210-5-72693

(加入者名) ビラールの医療と自立を支える会

## 新型コロナ問題と私たちの事業地域

— ジェネラルサントス市の助産所と、12月の地震被災地ビラールの村プロルサロから —

世界で、日本で、4月半ばを過ぎても収束の見通しがたない新型コロナウイルス問題、当団体としても、これまでに経験したことがない年度末、新年度を迎えました。

4月7日に、東京を含む7都府県対象の緊急事態宣言が出た日本に対して、私たちの事業地域があるフィリピンでは、3月のうちに、より拘束力のある都市封鎖（ロックダウン）がマニラなど大都市から順次実施され、ミンダナオの私たちの事業地域でも、移動制限による影響が出てきました。

レイクセブン町では3月初めには休校措置が取られていて、SCMSIでも修了式、卒業式等の年度末行事はすべて延期になっています。学校再開はコロナ問題の終息を待つということで予測は難しいですが、例年、本4月号に掲載している卒業式に臨む里子の写真や、それぞれの支援者への感謝の手紙等は、遅くとも10月発行の103号でお届けできるのではと思っています。

一方、パササンバオ助産所を運営するPIHS代表ナプサさんからは、医療保険加入推進事業（関連記事P3）は予定通り3月末に終了したが、助産所については、4月9日付のジェネラルサントス市の都市封鎖の発表を受けて、一時閉鎖を決めたという知らせが届きました。感染症設備のない助産院での妊産婦受け入れは危険との判断からで、ナプサさんを含む医療スタッフは自宅待機しているということでした。

保険診療の増加、経営の安定、自宅出産のリスクを減らすという目標に向けた歩みの一時ストップは残念ですが。

助産所はまた、2017年12月の開設以来、24時間対応の看板を掲げていて、いつでも、また、手元にお金がなくてもとりあえず対応してくれる駆け込み寺的医療機関として、妊産婦以外の住民にも頼りにされ、応急手当や専門病院への搬送等により、多くの命を守ってきました。



24時間対応の看板を掲げた夜間の助産所正面

しかし、助産所閉鎖後も訪れる患者に対しては、医療者である自分自身の感染、さらに、敷地内の自宅で同居する高齢の母親への配慮も必要で、心ならずもお断りしているというナプサさんの苦渋の選択にも触れていました。

ナプサさんからは、都市封鎖で苦境に置かれた貧困住民に対する政府の遅い対応を待つことなく、昨年度、私たちの支援でヤギ飼育、水道建設、コミュニティースクールが始まったムジャ地区での食物配布から、支援活動を始めたいということでした。

ムジャはもともとビラール民族の居住地でしたが、ミンダナオ南西部でのムスリム過激派と政府の戦闘などによる避難民の移住地ともなっていて、特に貧しい住民が多い地区です。

一方、12月の地震で小学校が半壊し、山腹斜面の畑も崩落したビラールの村プロルサロからも、元奨学生で村の教育担当村議スヌーリアにより、私たちの緊急支援や校舎建設支援（関連記事P2）に対する感謝とともに、新たな試練、新型コレラ問題に関連して村の窮状を伝えてきました。

山腹のコーンや根菜類畑の被災で、収穫皆無の状況から立ち直っていない住民たちは、新型コロナ対策としての都市封鎖、移動制限により、大農場での季節労務などの代替収入源も失うこととなり、飢餓が広がっているようです。村の歳入の5%充当の緊急対策予算は、すでに12月の地震直後の食糧支援に全額充当されていました。

当団体が属している日比NGOネットからも、感染への怯えと空腹にさらされているマニラのストリートチルドレンの現状と支援要請が届きました。

もちろん日本でも医療事情の悪化、4/16には全国に拡大された緊急事態宣言のもと、中小の事業主や非正規雇用の市民の困窮が日々伝えられています。

私たちとしては、何よりも元凶である新型コロナウイルス感染拡大防止のために、日々の行動を慎むとともに、医療現場で苦闘されている方々、経済的に苦境に置かれた人々に思いを寄せて、救済政策では十分でない部分で助けあうことができればと思います。

なお、ミンダナオの事業地域のうち、PIHSには、助産所運営補助金を前倒して支援するとともに、プロルサロ村については、少なくとも子どもたちを飢餓から救うため、給食支援をと考えています。厳しい年度初めを迎えました。引き続きよろしくお願ひいたします。（山崎）